

情との溢るゝものである。

明治11年には特旨を以て正4位を追贈せられ、太田金山の南端天神山に縣社高山神社として祀られた

五、新島 襄

元治元年は京都始御門の變、長州征伐等が相次いで起り、將に崩壊せんとする幕末の争亂が、その極に達せんとした年である。さうして騒然たる時勢の中で、6月14日の夜半、北邊なる蝦夷地渡島灣頭に碇泊中の外國帆船に密かに忍び込んだ青年があつた。この青年こそ後年同志社を創めて明治文化に偉大な功績を致した新島襄その人であつた。同志社と言へば明治初年慶應義塾と相對して日本最高最新の學府であつた。その門よりは幾多の優秀なる宗教家思想家を輩出せしめた。襄は實に三田の福澤諭吉と共に明治の先覺者であり、近代文化の指導者であつた。新島襄は上野國安中藩の人である。天保14年江戸の藩邸に生れ、幼名を七五三太と呼んだ。襄とは後に恩人たる米人ハーデイがイスラエル民族發展の基を聞いたジョセフにあやかつてつけたものである。父は板倉家に仕へて祐筆を勤め、一家揃つて慈善の心深くその家庭は圓滿清福であつた。襄は幼時より學識才智人に優れ、16歳の時、杉田玄瑞に就いて蘭學を研究し、天文・物理の大體を解するに至つた。偶々江戸海濱にて碇泊の一和蘭軍艦の雄姿を眺め、到底我が和船の及ぶ所に非ざるを痛感し、之より航・海測量等の研究に心を傾けた。一日漢譯の聖書拔萃を讀んで基督教研究の希望に燃え、その豫備として英語修得の爲、函館に赴いたが任せず、遂に渡米を決心し、帆船に投じてボーイとなつて働きつゝ慶應元年七月ボストンに上陸したのであつた。天涯萬里の孤客襄は幸ひにして信仰篤い紳商ハーデイの知遇を得、フイリツプス中學・アーモスト大學・アンドヴァ神學校に學んだ。此の間において故國日本は明治維新を迎へて、諸事大改革が行はれ、明治四年歐米視察の岩倉大使一行がワシントンに來着した際には襄はその案内を委囑され、一行と共に歐洲にも渡り、教育・文物・制度を視察して再び米國に歸つた。襄は、文明の基礎は國民の教化振興にあるから、祖

國を歐米諸國と對等ならしめるには、單に物質上の文明模倣よりは寧ろその根本を培ふ事が急務なりと確信し、歸國後は學校を創立して國家に貢獻しようと決心した。明治七年六月アンドヴァ神學校を卒へた頃會々ロトランド市に開かれた傳道大會に招かれ、故國が最も要求する基督教主義教育機關及び其の費用について涙と共に聽衆に訴へ、15分間の演説を以て五千弗の資金を得た。同年12月、歸朝して直ちに郷里安中に到り、10年振りに懐しの父母に見え又郷黨に基督教の精神を説示し、安中に安中教會を創立した。次いで京都に赴き、宣教師デヴィスと共に「あらゆる迫害困難と戦ひつゝ學校設立に奔走し明治8年11月僅か八名の生徒を以て同志社開校の式を擧げた。以後舊會津藩士本覺馬の後援を得て（襄を見込んで、妹八重子を妻にめあはせた）身を以て只管同志社の發展に全幅の努力を注いだ。自主獨立を以て校風と爲し、政府要路の顯官より切りに仕官を勧められても「予は貴下の懇切なる忠言に對して深く感謝の意を表するものなり。然れ共、予若し政府の一地位を得ることありとするも、之果して幾何の利益を吾が邦に與へ得べきか、予は殆どその益なかるべきを信ず。然るに之に反し、この山水明媚の地を下して幾多有爲の青年男女を教育し、將來邦家の爲盡す所あらんとする幾百千の新島を養成するを得ば、吾が邦の爲に貢獻する所なしとせず。之子が畢生の大目的なり。」と言つて之を謝絶した。此の決心と努力との効果は空しからず、校運は次第に隆盛に赴くので、16年に至り彼は同志社大學設立の意圖を發表し、17年4月再び歐米の教育視察に赴き翌年12月歸朝するや、其の頃既に心臓を病めるにも拘らず、大學設立の爲に東奔西走したが其の業未だ半ならざるに明治23年1月23日、東京郊外大森の客舎において48歳を一期として永眠した。

新島襄は眞に徳行の人、信念の人であり、明治教育界の權威者であり、日本の宗教家として内外に仰がれた人である。大正4年、在世中の功勞を思召されて従4位を追贈せられた。48年の生涯は、決して長いものではないが、その功業は、永しへに國家と共に存するであらう。(終)